



金はなくても自由な時間はたっぷり。これが若者の特権だ。格安の割引切符を手に鈍行列車を途中下車しながら東海道を親しい友人と野次喜多旅行するなどということは現役の社会人には不可能だ。こうしたことは、まさに「時持ち」のみ許される「贅沢」なのだ。もっとも「どんな時間が一番欲しいか」という問に対して最近の調査で小学生が一番欲しいと答えたのがなんと睡眠時間だった。いまや青少年少女を「時持ち」と呼ぶわけにもいかない。最近大人の世界ではスローライフという言葉が使われる。経済成長などいつまでも言っていないで、時間を少しのんびりいこうじゃないか(11/30日経夕刊「あすへの話題」東大教授：吉川洋より抜粋)

荒井昇の辛口コラム⑱

【金持ちと時持ち】

上記の吉川教授によれば、“英国では1870年には年間労働時間は2984時間だったのが、第一次大戦の直前1913年には2600時間になり、1950年には1992時間に、そして1992年にはついに1491時間に減少した。一方1870年から1992年までの120年間に一人当たりのGDP(国民総生産)は4.6倍になった。歴史的にみると「金持ち」と「時持ち」への道は逆方向というよりはむしろ同じ方向を向いている。”考えるにいまの社会は「金持ち」になるため年少の頃からガムシャラに勉強し、社会に出ても仕事に追われる。「金持ち」になったと思って、我に帰り、「時持ち」になりたいと思ったら、この過酷なプロセスで人生の本来の楽しみ方も忘れてしまって、老若男女むなししい現実と向き合い、孤独の生活に没してしまう。

【グローバル経済の破綻と現代資本主義経済の崩壊】

現代人は「金持ち」であるが、「時持ち」でないと述べたが、実際には多くの国民が「金持ち」でも「時持ち」でないと実感している。これは、この10年グローバル経済化で富が一部の人間に偏ってしまい、富の分配が(この10年で中流という意識がなくなった)うまくいっていないことにある。もうひとつはインターネット・携帯電話・教育制度等で情報・上辺の知識が氾濫し、人間が自立(自分を制御)出来なくなってしまったことにある。この問題の根底として自由放任資本主義の下での規制緩和に原因がある。人間社会は人間本来が持つ無秩序さを規制するため、古代から法律を作り、それを育てて来た歴史がある。それをグローバル経済という、いかにも説得力のある言葉の元で、すべての大事な秩序を世界的に破壊してしまった。グローバル経済はWTO(世界貿易機関)の2006年7月の自由貿易多国間交渉(ドーハラウンド)でEU、米国、及び発展途上国との間で、その富の分配の不公平さにより会議が空中分解し、既に失敗してしまった。また、今年7月に発生した米国のサブプライムローンの破綻をき



っかけに始まった米国住宅バブルの崩壊でもグローバル経済の失敗は明確にされた。

【サブプライムローンの破綻の拡大】

荒井会計通信のVOL15(今年7月発行)で予測したように、いま米国をはじめ世界経済はサブプライムローンの破綻の拡大で毎日、株価が暴落しないか右往左往している。各国の金融当局は政策金利を下げたり、銀行や証券会社に金融支援して急場を何とか凌いでいる。また今月6日には米国はローンの借手の金利の一部を5年間凍結する等のこの問題の火消しに躍起になっている。しかし、これらの政策はあまりにも空しい対策である。なぜならば、バブル崩壊規模及びその恐ろしさを専門家を含めほとんどの人々が理解していないからである。次号でこの規模等を具体的化していきます。次号につづく

入所ご挨拶

山岸弓子

はじめまして、9月に入所した山岸弓子です。

大学卒業後、税理士の勉強を始め、デパートでアルバイトをしながら4年間受験に専念してきました。趣味は、旅行に行くことと、テニスをすることで、特技は書道とピアノです。

私のセールスポイントは、何事も最後まで諦めないところ です。

「成せばなる成さねばならぬ何事も

成らぬは人の成さぬなりけり」

子供の頃、伯父からこの言葉を教わりました。勉強を始めた当初は自分が予想していた以上に大変で辛かったのですが、この言葉を思い出して今まで頑張ることが出来ました。仕事は勉強以上に大変だと思いますが、この事務所でいろいろな経験をして一人前になれるよう頑張っていきたいです。こんな私ですが、どうぞよろしくお願ひします。

